

保育所における指導計画作成に関する実態調査

—保育士へのアンケートをもとに—

三好 年江*

保育学

(2012年11月28日受理)

「保育の計画」は保育所において保育の質を担保する重要なものである。しかし、保育士にとっては計画が苦手であったり、計画が実践に活かせなかったりと課題が多い。そこで、保育士は計画の必要性をどの程度感じているか、作成にあたってどのような困り感や悩みがあるのか指導計画に関する実態調査を行った。指導計画の必要性については、保育士の50%が「とても必要」、42%が「必要」と答え、約9割の保育士が必要であると感じていることがわかった。勤務年数別に見てみると、1年目の保育士は「とても必要」が4割弱だったのに対し、21年目以上のベテラン保育士は9割が「とても必要」と答えていた。また、計画作成における困り感や悩みは約6割の保育士が持っており、その内容は、「『保育の内容』理解」や「書き方」に関することが多かった。このことから養成教育や現任研修においては、計画作成の技術論にとどまるのではなく、保育の基本をおさえた上で「計画作成のあり方」および「計画が持つ意味」について理解を深めることが重要であることがわかった。

(キーワード)指導計画, 保育の基本, 研修, 子どもの実態

はじめに

平成20年、保育所保育指針（以下「指針」）が告示化され、保育所は、「保育の目標を達成するために、保育の基本となる「保育課程」を編成するとともに、これを具体化した「指導計画」を作成しなければならない¹⁾。」と保育所における「保育課程」および「指導計画」作成の義務を明確に打ち出した。さらに、「保育所は『保育の計画』に基づいて保育し、保育の内容の評価及びこれに基づく改善に努め、保育の質の向上を図るとともに、その社会的責任を果たさなければならない²⁾。」と明記され、「計画」が保育の質を担保する重要性な役割を果たすものであることが改めて強調された。

「保育の計画」には「保育課程」と「指導計画」がある。「保育課程」は平成20年の指針改訂まで「保育計画」と呼ばれており、保育所における全体計画という位置づけがなされていた。しかし、「保育課程」に変更され、計画の最上位に位置づけられ保育の基本をなす重要な意味を持つものとなった。そこで、各保育所は、自園の保育理念、保育目標、在園期間における子どもの育ちや園の保育の基本姿勢を示す「保育課程」を改めて編成することとなった。また、それに基づいた保育の質の向上につながる具体的な各種「指導計画」を作成することが義務づけられたのである。

このような背景から、保育現場では、「指針改定に伴う保育課程の編成方法」、「指導計画の様式検討」、「質の向上につながる保育の計画」等の研修が行われるようになり、筆者も研修会の依頼を受けることが多くなってきた。

そのような研修で耳にすることは、保育所において指導的立場にある園長や主任保育士からは、「どのように指導してよいのか迷う」「指導計画の大切さを十分に伝えられない」「個々で理解のばらつきがあり共通理解が難しい」などの悩みであった。また、保育士からは「指導計画の作成が負担だ」「指導計画が書けない」「書類がなければ仕事が楽しいのに」などの本音も聞かれ、指導計画に対する悩みや負担感があることがわかった。「計画作成の方法」や「実践とつながる計画作成」など、様々な研修を行ったとしても、そのような保育士の実態やニーズを踏まえた研修が行われなければ、研修は、保育士にとって、机上の空論でしかない。大切なことは、計画することが保育の質の向上につながるということ、つまり、目の前の子どもが、現在を最も良く生き、よりよく育つための保育を実現することなのである。そして、保育士自らが実感を伴い、計画の必要性を感じることはないかと思われる。

本研究では、保育士は指導計画の必要性をどのように感じているのか、また、指導計画作成において何に困ったり悩んだりしているのかその実態を明らかにする。そ

*連絡先：三好年江 新見公立短期大学 幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

して、指導計画に関する現任保育士の研修の在り方および保育者養成校における教育について示唆を得ることとする。

I 調査の目的

保育士は指導計画の必要性をどのように感じているのか、また計画するに当たってどのような困り感や悩みを抱えているかその実態を明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

1. 調査対象

2011年8月、A市で開催された「指導計画作成に関する研修会」に参加した保育士136名を対象とする。研修会に参加したA市の保育士136名は、常勤のクラス担当保育士が99名、常勤のフリー保育士が8名、臨時保育士22名、その他7名であった。勤務年数は、1年目が18名、2年から6年目が52名、7年から10年目が17名、11年から20年目が39名、21年目以上が10名であった。

2. 調査方法

独自に作成した「指導計画に関する質問紙」を研修会会場に入室した保育士に手渡し、研修会の開始前に質問に回答してもらうよう依頼した。質問項目は、①属性に関する項目を選択式で回答、②指導計画の必要性に関する項目を選択式で回答③記録の必要性に関する項目選択式で回答、④指導計画作成に関する悩みや困り感について自由記述で回答④記録に関する悩みや困り感について自由記述で回答するものである。今回の調査報告は指導計画作成に関することであることから、対象となる質問項目は①②④とする。

3. 分析方法

上記、①②については、単純集計を行い④で記述された内容については、KJ法により整理を行った。

4. 倫理的配慮

調査結果などについて、個人が特定されることがないように留意した。対象者に本研究の趣旨を口頭にて説明し同意を得て質問紙を提出してもらうようにした。

III.「保育の計画」の概要

1. 「保育の計画」とは

各保育所は、保育の目標を明確にし、その目標を達成するために保育の方向性を予測し、子どもの実態に応じて計画を作成する³⁾ようになっている。「保育の計画」とは、保育の目標を達成するためのものであり、「保育課程」と「指導計画」がある⁴⁾。

1) 保育課程

「保育課程」とは、その園の基本的な保育の姿勢を示し、在園する期間の子どもたちの生活全体の見通しをもつために編成されるものである。すべての計画の最上位に位置づけられ、地域の実態、子どもや家庭の状況、保育時間などを考慮して編成されなければならない。また、全教員が共通理解し、一貫性、継続性、組織性をもって編成される。

2) 指導計画

(1)指導計画とは

「保育課程」を現実的なものとするためには、乳幼児の生活や発達に即した具体的な計画が必要であり、これを「指導計画」と呼んでいる。つまり、「指導計画」とは「保育課程」に基づいた具体的な実践計画であり、子どもの発達を助長する援助計画⁵⁾とも言われている。乳幼児の発達する姿を長期的に見通し、「ねらい」や「内容」を想定する長期の指導計画と、それを更に具体的な日々の生活に即して、一人一人の乳幼児の興味・関心・発達に応じた「ねらい」等を考える短期の指導計画がある。

長期の指導計画には、年・期・月指導計画があり、それぞれの時期に達成したい「ねらい」および、それを達成するために経験する「内容」が示されている。年、期、月は連続性および関連性を持ちながら、期間が短くなるほど「ねらい」や「内容」等がより具体的になっている。

短期の指導計画には、週・日の指導計画があり、週指導計画は、月の指導計画を更に具体的にした1週間を単位とする指導計画である。日の指導計画は、一般的に日案と呼ばれ、週指導計画を更に具体的にした一日を単位とする指導計画である。実際には、週と日を合体させた週日案と呼ばれる指導計画を作成しているところが多い。ただし、実情に応じて日案を作成したりする。

(2)指導計画の基本的な考え

いずれの指導計画についても、作成の要点であり最も基本となることは、乳幼児の実際の姿を捉えるということである。つまり、指導計画は援助計画であることを考えると、何を援助するのが出発点⁶⁾である。乳幼児がいろいろな経験を積み重ねながら、乳幼児期に育てておきたい力を自分のものにしていくように計画性のある援助をしなければならないのである⁷⁾。

次に、大切なことは具体的な「ねらい」と「内容」を設定するということである。保育所における保育は、養護と教育が一体に行われることが特色であることから「ねらい」と「内容」はそれぞれ「養護」と「教育」2つの視点をもつ。その時期に、子どもの生命の保持および情緒の安定を保障するために保育士が行わなければならないことは何か（養護面のねらい）、子どもの中に育つもの、今育てたい心情・意欲・態度は何か（教育面のねらい）、そのために保育士が行わなければならないことは何か（養護面の内容）、子どもが経験する必要のあること、経験させたい

ことは何か（教育面の内容）など、子どもと生活をともにしながら具体的に感じとっていくのである。

続いて、「環境の構成」について十分検討がなされる必要がある。環境構成で大切なことは、子どもの発達、環境との相互作用の中で促進されるということから、子どもが興味・関心を持って自ら環境に関わっていけるような素材・遊具・用具、「ねらい」と「内容」が達成される環境が検討されなくてはならないのである。

続いて、「ねらい」と「内容」に基づいた環境にどのように関わり活動を展開していくか「子どもの活動を予想」する。そして、子どもが自分で活動を展開しねらいを達成していくための「援助および配慮」をどのようにしていくかについて具体的に考えることが、計画作成の要点であり大切なこととなる。最後に、指導計画に基づいて実践された保育について「評価」を行い、改善後次の計画作成へと繋がっていくのである。この循環が保育の質向上につながる重要な流れとなる。

Ⅳ 結果と考察

1. 指導計画の必要性に関する意識

まず、指導計画の必要性について136名に尋ねたところ、「とても必要」と答えた保育士は68名で全体の50%であった。「まあまあ必要」が57名で全体の42%、「どちらでもない」が8名で全体の6%、「必要とは思わない」が2名、「全くそう思わない」が1名であった。全体で見ると、「とても必要」「まあまあ必要」を合わせると約9割の保育士が指導計画の必要性を感じていることがわかった。一方で、必要性をあまり感じていない保育士も1割いることがわかった(図1)。

続いて、勤務年数別に必要性に関する意識の違いがあるかどうか見てみることにする。1年目の保育士18名の

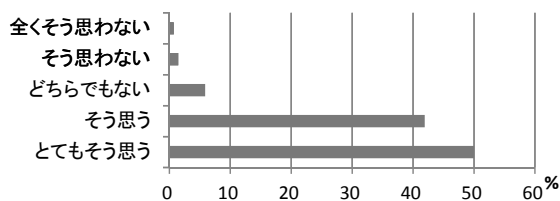


図1 指導計画の必要性 保育士 n=136

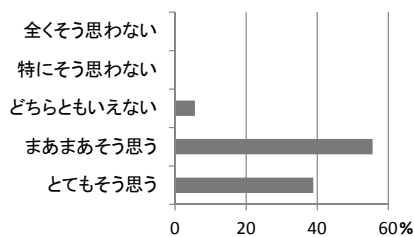


図2 指導計画の必要性 1年目保育士 n=18

内、「とても必要」が7名(39%)、「まあまあ必要」が10名(56%)、「どちらとも言えない」が1名であり、「まあまあ必要」が最も多かった(図2)。2年目から6年の保育士52名については、「とても必要」が24名(46%)、「まあまあ必要」が22名(42%)であった。また「どちらとも言えない」が3名(6%)「特に必要とは思わない」が2名(4%)「全くそう思わない」が1名であった。この層は、「とても必要」が1年目より増えているものの、「どちらともいえない」「必要とは思わない」など必要性を感じていない保育士も見られ、考えの幅があることが分かった(図3)。7年目から10年目の保育士17名は、指導計画が「とても必要」が7名(41%)、「まあまあ必要」10名(59%)であり(図4)、11年から20年目の保育士39名は「とても必要」が21名(58%)、「まあまあ必要」が15名(42%)で(図5)、7年目から20年の保育士は「とても必要」「まあまあ必要」と全員が必要と答えていた。21年目以上の保育士10名

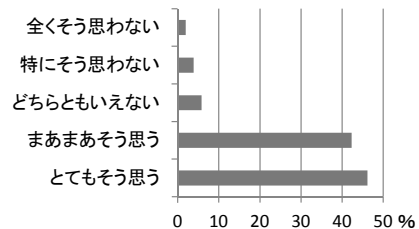


図3 指導計画の必要性 2年目～6年目保育士 n=52

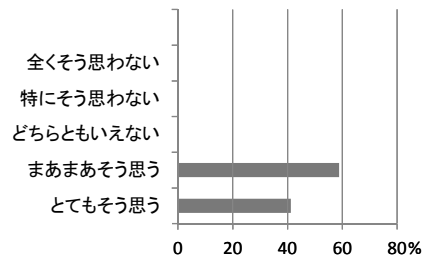


図4 指導計画の必要性 7年目～10年目保育士 n=17

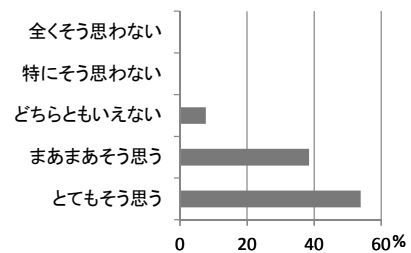


図5 指導計画の必要性 11年目～20年目保育士 n=39

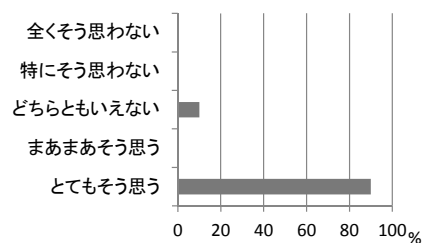


図6 指導計画の必要性 21年目以上保育士 n=10

は、「とても必要」が9名（90%）,「どちらとも言えない」が1名であり、最も多くの保育士がその必要性を感じていることが分かった(図6)。

勤務年数別では、1年目の保育士が指導計画を「とても必要」と思う割合は4割未満であり、その割合が最も低かった。2年目から6年目までの保育士においては「とても必要」,「まあまあ必要」を合わせると約9割が「必要」と答えているものの,「どちらともいえない」「必要と思わない」「全く必要と思わない」など指導計画の必要性を感じていない保育士もいることが分かった。回答者が最も多いということもあるが、他の年数層に比べ最も多様な考えがあることが分かった。11年目以降からは「とても必要」の割合が増え、21年目以降では、9割の保育士が「とても必要性」と答えており、ベテランといわれる指導的立場にある保育士ほど計画の必要性への意識が高いことが窺われた。

調査結果から多くの保育士は、保育を行うにあたって指導計画は必要だと思っていることがわかった。勤務年数別に見てみると,「とても必要」と思う割合は、10年以下は半数に満たないが、11年目以上になると約6割、21年目以上になると9割が計画の必要性を強く感じることがわかった。1年目から6年目までの保育士の中には、割合としては多くないものの計画が必要かどうか「どちらとも言えない」や「特にそうはおもわない」「全くそう思わない」などと考える保育士がいることがわかった。勤務年数が浅い保育士は、保育の経験が浅くベテランに比べると知識や技術が乏しく、子どもの様々な言動に瞬時に対応することが困難なことから、より細やかな計画の必要性を感じているのではないかと予測されたが、調査の結果は逆であり、ベテランになるほど計画の重要性を感じていた。

2. 指導計画作成における困り感

続いて、保育士は、指導計画を作成するにあたってどのような困り感や悩みがあるのか見ていくことにする。自由記述で回答してもらった結果、136名中85名（63%）の保育士から回答があり、93件の困り感や悩みが見られた(表1)。記述内容をKJ法にて分析して見ると、5つのカテゴリーに分けられ,【書き方】に関する悩みが36件で最も多かった。次に多かったのが,【『保育の内容』理解】に関する悩みで29件,【マンネリ化】が11件,【計画作成のための環境づくり】が7件,【個人差への対応】が6件であった。

更に各カテゴリーの内容を見てみると,【書き方】は5つの内容に区分され,【様式変更への対応】が11件,【文章表現】が9件,【養護】が7件,【ねらい】が4件,【保護者の思い】が3件,【配慮】[全体]の書き方が各1件であった。2番目に多かった【『保育の内容』理解】は9つの内容に分け

表1 指導計画作成における保育士の困り感
保育士全体 (93件)

カテゴリー	内容
マンネリ化 (15)	内容が同じになる (8)
	ねらいが変わらない (4)
	子どもの姿が同じになる (3)
個人差への対応 (6)	発達がちがう個と集団への対応 (4)
	乳児クラスにおける一人一人への対応 (2)
書き方 (36)	様式変更に伴う書き方 (11)
	文章表現が難しい (9)
	養護の書き方が難しい (7)
	ねらいの書き方に困っている (4)
	保護者の思いの記述 (3)
	配慮の書き方に困っている (1)
	全体の書き方 (1)
「保育の内容」理解 (29)	ねらいの立て方が難しい (8)
	養護の考え方 (6)
	遊びの展開 (5)
	評価の観点 (3)
	実践との関連 (3)
	各項目の関連 (1)
	5領域の考え方 (1)
	環境構成の捉え方 (1)
	配慮 (1)
計画作成の環境づくり (7)	時間の確保 (6)
	パソコン技術 (1)

られ,【ねらいのたて方】が8件,【養護の捉え方】が6件,【遊び】が5件,【評価】,【計画と実践のつながり】が各3件,その他[5領域][環境構成][各項目の関連][配慮]の理解が各1件あった。続いて多かった【マンネリ化】は、3つの内容に分けられ,【内容】が8件,【ねらい】が4件,【子どもの姿】が3件であった。【計画作成のための環境づくり】は3つの内容に分けられ,【時間の確保】が6件,【パソコン技術】が1件であった。最後に【個人差への対応】は、2つの内容に分けられた。「集団と個人のねらい」が4件,【乳児クラス】が2件であった。

続いて、勤務年数別に困り感と悩みの整理を行った。1年目9名(18名中)の保育士から12件の困り感があげられていた。【書き方】が5件と最も多く、次いで【個人差への対応】が3件,【『保育の内容』理解】【マンネリ化】が各2件であった(表2)。2年目から6年目29名(52名中)から31件の困り感があげられていた。【『保育の内容』理解】が12件と最も多く、次いで【マンネリ化】が11件,【計画作成のための環境づくり】【書き方】が各4件であった(表3)。7年目から10年目11名(17名中)の保育士から14件の困り感があげられていた。【書き方】が最も多く8件,

表2 指導計画作成における保育士の困り感
1年目保育士 (12件)

カテゴリー	内容
マンネリ化 (2)	内容が同じになる (1)
	ねらいが変わらない (1)
個人差への対応 (3)	発達がちがう個と集団への対応 (2)
	乳児クラスにおける一人一人への対応 (1)
書き方 (5)	ねらいの書き方に困っている (2)
	養護の書き方が難しい (1)
	配慮の書き方に困っている (1)
	全体の書き方 (1)
「保育の内容」理解 (2)	遊びの展開 (2)

表3 指導計画作成における保育士の困り感
2年目から6年目保育士 (31件)

カテゴリー	内容
マンネリ化 (11)	内容が同じになる (7)
	子どもの姿が同じになる (3)
	ねらいが変わらない (1)
書き方 (4)	保護者の思いの記述 (3)
	ねらいの書き方に困っている (1)
「保育の内容」理解 (12)	ねらいの立て方が難しい (5)
	遊びの展開 (3)
	評価の観点 (1)
	各項目の関連 (1)
	5領域の考え方 (1)
	環境構成の捉え方 (1)
計画作成の環境づくり (4)	時間の確保 (3)
	パソコン技術 (1)

表4 指導計画作成における保育士の困り感
7年目から10年目保育士 (14件)

カテゴリー	内容
マンネリ化 (2)	ねらいが変わらない (2)
書き方 (8)	様式変更に伴う書き方 (6)
	文章表現が難しい (2)
「保育の内容」理解 (4)	養護の考え方 (2)
	ねらいの立て方が難しい (1)
	配慮 (1)

表5 指導計画作成における保育士の困り感
11年目から20年目保育士 (30件)

カテゴリー	内容
個人差への対応 (2)	発達がちがう個と集団への対応 (1)
	乳児クラスにおける一人一人への対応 (1)
書き方 (17)	養護の書き方が難しい (6)
	様式変更に伴う書き方 (5)
	文章表現が難しい (5)
	ねらいの書き方に困っている (1)
	養護の考え方 (4)
「保育の内容」理解 (10)	実践との関連 (3)
	ねらいの立て方が難しい (2)
	評価の観点 (1)
計画作成の環境づくり (1)	時間の確保 (1)

表6 指導計画作成における保育士の困り感
21年目以上の保育士 (6件)

カテゴリー	内容
個人差への対応 (1)	発達がちがう個と集団への対応 (1)
書き方 (2)	文章表現が難しい (2)
「保育の内容」理解 (1)	評価の観点 (1)
計画作成の環境づくり (2)	時間の確保 (2)

次いで【『保育の内容』理解】が4件、【マンネリ化】が2件であった(表4)。11年目から20年目30名(39名中)の保育士から30件の困り感や悩みがあげられていた。【書き方】が17件と最も多く、次いで【『保育の内容』理解】が10件、個人差への対応が2件、諸条件の整備が1件であった(表5)。最後に、21年目以降の保育士6名(10名中)から6件の困り感や悩みがあげられ、【書き方】【計画作成のための環境づくり】がそれぞれ2件、【『保育の内容』理解】【個人差への対応】が各1件であった(表6)。

今回の調査で、保育士の約6割が指導計画作成におい

て何らかの困り感や悩みをもっていることが分かった。特に困り感や悩みが多かったのは勤務年数が11年目から20年目の中堅からベテランと呼ばれる保育士であり、約8割の保育士が何らかの困り感や悩みをもっていた。もっとも少なかったのが、1年目の新任保育士で5割であった。

困り感や悩みの内容については、【書き方】に関することがもっとも多く、2年目から6年目の保育士を除くすべての層で最も多い悩みとなっていた。具体的な内容については、「様式変更に伴う書き方」が11件と最も多く、これは、指針の改訂に伴い、これまで使用してきた指導計画の用紙が見直され、追加項目や項目の表記が変更されたことから生じた問題と見られる。したがって、旧式で書き慣れていたと思われる7年目以降の保育士の割合が多かったのではないと思われる。次に多かったのが「文章表現」で9件あった。保育士の一般的傾向として、計画や記録といった思考し記述する行為に対する苦手意識があるとも言われているように、「文章を書くことが苦手だ」「考えを上手く文章に表現できない」などの悩みが見られ、これについても7年目以降の保育士に多かった。続いて「養護に関すること」が7件あり、「養護のねらいをどのように書けばよいかわからない」と、指針が改訂され改めて強調された「養護」に戸惑いが見られることがわかった。特に、11年目以降の保育士に多く見られた。

次に多かったのが、【『保育の内容』理解】に関わる困り感や悩みであり、「ねらいの立て方」や「養護の捉え方」「遊び」「計画と実践とのつながり」「評価の観点」に関する記述である。これらは、作成における技術というより、計画を立てる上で理解しておく必要がある保育の基本に関することである。例えば「ねらいを立てる」際は、まず「子どもの実態」を捉えて、子どもに育つことが期待される心情・意欲・態度は何かを読み取り「ねらい」として明確に打ち出し、保育の方向性や内容を決めていく。そして、実践後「ねらい」に対する評価を行い保育の改善が行われるのである。「子どもの実態」を捉えきれず方向違いの「ねらい」を立てたならば、子どもの育ちを支えることはできない。つまり、適切な「ねらい」を立てるということは保育における基本であり重要なことなのである。その他、悩みとして挙げられている「養護の捉え方」「遊び」「計画と実践とのつながり」「評価」についても、保育における「養護」とはどういうことなのか、「遊び」をどのように考えるのか、「計画」は実践にどのようにつながるのか、「評価」は何のためにあるのかなど、計画を作成するにあたっての基本であり改めて保育や計画の基本の再確認の必要性を感じた。

また、「マンネリ化」に関する悩みについては、2年目から6年目の保育士が最も多かった。計画には保育実践のマンネリ化を防ぐ役割があると言われている。しかし、

今回の調査では、計画そのものがマンネリ化してしまうことが悩みとしてあげられていた。目の前の子どもの発達を細やかに捉え、一人一人の子どもの育つ方向性を定めながら、その時々に必要な「ねらい」と「内容」を検討する。このことこそが一人一人の育ちを保障する計画であり大切なことである。なぜ「マンネリ化」になるのかその原因を探りながら、計画が持つ本来の意味についての再考が求められるのではないかと考える。

今回の調査で、保育士は計画作成に関して様々な困り感や悩みを抱えていることがわかった。特に、中堅からベテランと呼ばれる保育士に困り感や悩みが多く、指針改訂で改めて強調された「養護」の視点や「様式変更に伴う書き方」など、指針改訂に伴って生じた混乱が多いことが推測された。しかし、保育の本質や計画の基本的な考え方は何も変わっていないことから、「保育で大切にしなければならぬことは何か」「計画に位置付けていきたい重点項目は何か」など、様式や形式の変更に戸惑うことなく、自らが保育の基本と照らし合わせながら再点検する力も必要なのではないかと感じた。また、【書き方】としてあげられている内容についても、保育の本質や計画の基本的な考え方などの理解が深まることで困り感や悩みが少なくなるのではないかと思われるものが多くあった。保育は、「養護と教育が一体的に行われるもの」であったり、「ねらい」が到達点ではなく、子どもの中に育つ「心情・意欲・態度」と目に見えるはっきりしたものではなかったり、複雑かつ曖昧で分かりにくかったりする部分が多い。そのためにも、保育の基本を十分理解し計画の意味を踏まえて、子どもがよりよく育つための計画が必要であると考ええる。

最後に、悩みとして【計画作成の環境づくり】があげられていた。「計画は大切なこととは、分かっているけど日々の保育に追われ十分検討する時間がもてない」「勤務時間に見直しや検討までできない」「保育の準備、行事等の保育を行いながらの計画作成は大変である」などの声が聞かれ、計画作成のための時間が十分確保されていない実態が明らかになった。また、「共通理解を図るための会議や研修が必要と思いながら時間がとれない」など厳しい現状もあった。これら問題の改善については、様々な角度から検討がなされなければならないと考えるが、子どもを保育する上で何が最も重要なのか、必要なことに必要な時間がかけられているのか、それらを子どもの目線で検討し、園全体で計画を創意工夫していくことも望まれるのではないかと考える。

V 今後の課題

(1) 保育所における現任研修の在り方について

今回の調査では、ベテランになるほど計画の必要性を

強く感じている割合が多かった。経験の浅い保育士は、ベテラン層に比べるとその割合は少なく中には必要性を感じない保育士も見られた。日本の幼児教育の基礎を築いたと言われている倉橋が、「計画なくして幼児達を迎えようことは、放漫たる以上は無責任である。思いつきや、気まぐれや、ゆきあたりばったりで、大切な幼児の生活に臨むことは許されない。一日一日が再びすることのできない保育である。用意の上に用意を重ねずして、これを行うことができない⁸⁾。」と述べているように、計画の必要性および重要性は、保育士が保育の専門家として子どもと関わりを持ちはじめた時から、いや、それ以前の養成段階から強く認識されなくてはならないと考える。保育士は、日々子どもと関わりながら、子ども一人一人がよりよく育つために、子どもの実態に即した「ねらい」および「内容」を考え、「ねらい」を達成する環境構成や援助を行う。その結果、子どもの豊かな生活が保障され、子どものよりよい育ちが見られるのである。したがって、「用意の上の用意」となる計画は、必要不可欠であるということが十分認識されなくてはならないのである。

また、計画作成における困り感や悩みから、保育の基本や計画についての十分な理解が必要であることが見えてきた。

以上のことから、研修においては、「どの項目に何を記述すればよいのか」などといった指導計画作成に関する技術論を主眼に置くのではなく、まずは「計画の意義」や「保育の本質に根ざした計画とは何か」について考えたり計画の理解につながったりする研修内容が必要だと考える。そして「保育の基本」は踏まえられているか、目の前の子どもがよりよく育つために必要な保育内容が書き表されているか、などについて考える機会となる研修が求められるのではないだろうか。保育現場において「計画と実践がつながっていない」「正直なところ書かなければならないから書いている」などの声が聞かれる実態があることから、保育士自身が「実践と計画は切り離せず、子どもがよりよく育つためには計画は必要不可欠である」と実感できることも大切である。そのためには、研修の在り方も、講演会のような単発の話ではなく、実際の計画を検討し、実践や評価・改善を繰り返しながら継続して行うことができる演習などの工夫も必要であると考ええる。

2) 保育者養成校における教育内容について

以前は、保育原理や保育内容総論等でわずかに触れられていた保育に関する計画論（カリキュラム論）が保育者養成校の専門科目の中でも重要な存在となり、平成23年度より、「保育課程論」として必修科目に位置づけられた。これより保育士になる学生は、計画の基本から応用について、今まで以上にしっかり学び保育現場に出ることとなる。今回の調査から、見えてきたことは、「保育の基本」を踏まえた「計画」作成の重要性である。つまり、計画

作成が技術論にとどまることなく、保育の本質に根ざしながら「一人一人の子どもが現在を最も良く生きる」計画となるよう、計画を創意工夫できる力の養成も必要なのではないかと考える。

養成校における指導計画作成の講義の一例ではあるが、「子どもの姿は分からないから」という理由で、子どもの姿を省略して「ねらい」や「内容」を検討する指導が行われることがある。保育は、子どもの姿に始まると言われている。つまり、子どもの実態を捉えた上で、育てたいと思う保育士の願いが生まれ、それを方向付ける環境や方法等が検討されなければならない。このことから考えると、前述した講義内容は本質に根ざすという点で検討を要するものであることがわかる。

今後は、保育現場と養成校が共に考えていく関係を築きながら、研修の在り方や教育内容を工夫・検討し、保育の本質に根ざした一人一人の子どもの育ちを支える指導計画についてさらに検討を進めていきたい。

謝辞

本調査にご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省「平成 20 年改訂保育所保育指針」フレーベル館, 22, 2008.
- 2) 前掲 1)
- 3) 厚生労働省「保育所保育指針解説書」フレーベル館, 125, 2008.
- 4) 前掲 1)
- 5) 岸井勇雄：幼児教育課程総論 第二版. 同文書院, 147, 2003.
- 6) 前掲 5)
- 7) 前掲 5)
- 8) 倉橋惣三：系統保育案の解説. 倉橋惣三著作集 4, フレーベル館, 295, 1965.